

07/03/14

人、街に生きる

東大学生寮・同志会 ②



①創設者・阪井氏らの写真が飾られたチャペルで賛美歌を歌う(左から)磯野健太郎、横田、金井、千代、池田の皆さん
②小西氏の言葉に導かれたと話す金井さん(台東区駒形で)

化学会社顧問の池田尊(モト)は東京大学のキリスト教学生寮「同志会」に一九五六年、入寮した。理事長名に「石館守三」とあるのを見て、医学部で師事する石館教授とは別人だと思った。

池田の知る石館はハンセン病や心臓病、がんなどの治療薬開発の輝かしい業績で知られた。医学部教授から初代薬学部長になり「法皇」と呼ばれた実力者だった。そのイメージとキリスト教の寮が結びつかなかった。石館(一九〇一―一九六)は創設者阪井徳太郎の後を継ぎ、四六年から五十年近

く、同志会の運営に力を注いだ。金曜夜の会合に来る石館は「信仰や人間関係の話ばかりで、大学とは全く違った」と池田。学生から「守ちゃん」と慕われたその姿は、自分の業績を誇ることがなかった阪井の姿勢に重なる。

池田は「先生は東大退官後も国立衛生試験所長や薬事審議会会長など要職を歴任されたが、同志会では神と人に仕える謙虚な態度を貫かれた」という。石館は、自分を信仰に導いた先



「手に来る業」全力で

輩の小西芳之助(一八九八―一九八〇)を終生、兄のように尊敬した。小西は四十九歳で銀行を辞め、牧師になることを決意した異色の人。その教えも、浄土宗に学んで主イエスの名を呼ぶことが行になるという独特なものだった。地元教会に受け入れられなかった小西のため、石館は自宅敷地を割り、高円寺東教会を設立させる。

「主イエスと呼び励まん、今日もまた、手に来る業を。御国目指して」

小西は同志会の後輩たちに繰り返し説いた。公認会計士の金井(シロ)は「いまに、この言葉に人生を導かれている。就職した陶器メーカーで「お荷物」と呼ばれた部門に配属され、原価計算に問題があることに気がつき、改革を提案した。しかし、「若造の出しゃばり」が受け入れられるはずもなく、反発した金井は独学で公認会計士や情報処理技術者の資格を取得した。

会社も今度は提案を入れ、お荷物はドル箱部門に変わる。三十代半ばで会社を辞め、公認会計士になり、日本で最初にコンピュータを導入した会計監査を始めた。「手に来る業、つまり、与えられた仕事を全力でやるのが道を開いた」と金井は振り返る。

「私は学生時代も落第したが、サラリーマンも落第です」と苦笑する千代(博史)。電電公社(現NTT)入社後、主計部門などエリートコースを歩むが、広報部門でマスコミ対策を任せられ、記者とやりあって「はずれた」という。五十代で関連会社に出向し退職。同志会会報に小西の教えについて多くの文章を著している。「社会に出て要領よく生きられなかった者が同志会にこだわりの帰ってくるのかもしれない」

化学会社退職後、裁判所調停員を務める横田淳(みず)は「当時、寮にいた多くの者が小西先生の言葉を座右の銘にしている」という。現在、同志会百年史の編さんを進めている。(文中敬称略)

文・清水美和

写真・由木直子